

教判論の意味再考

松岡 暁洲

教判とは、經典の形式、意味、内容を分類整理して、各經典の優劣・浅深を判定することをいう。教判論の原型は、既にインド仏教のなかに見出すことができるが、教判論が盛んに行われたのは、中国仏教においてであった。

中国で教判論が発達した理由として、中国にもたらされた經典が、インドにおける經典成立の歴史的発展の事実にかかわりなく、前後ばらばらにもたらされたことから、そうした經典すべてを、歴史上の釈尊の金口直説と考えた故に、それに整然たる体系を与える必要があったからといわれている。

また、中国の仏教者達は、一見、両立しないように思える諸經の教説間にも、仏教の教化目的から考えて、その間に調和を見出さなければならなかった。こうした理由から、中国で教判論が盛んに行われるようになったといわれている。しかし、これは仏教が究極の目的とする証悟という最も重要な事実を欠落させた考え方であると思われる。

仏教の經論は、八万法藏といわれるほど膨大なものであ

る。こうした經論が現在に伝えられてきた背景には、經論を伝持した幾多の仏教者の並々ならぬ努力があった。なぜなら、經論はひとりでに伝わるものではないからである。

釈尊の菩提樹下の正覚に始まる仏教は、以後、各地に流伝し、その国土と民衆に強い影響を与えてきた。かつてインド・中国・日本の三国仏教流伝史上に名を留めた数多くの仏教者があった。人師・論師と呼ばれるそうした人々は、仏教が至上とする釈尊の正覚を、自らも得んとして、己れの全人格を賭して釈尊の正覚に肉迫し、そして分々の悟りを得たのであった。彼等は、各自が主体的に選り取った經典に導かれて、釈尊の正覚に迫っていったのである。

そして、自らの分々の悟りを可能にした經典を伝持した。その際、各々が主体的に選り取った經典が、他の經典といかに異なり、いかに優れているかを明らかにするために、それぞれが独自の教判論を打ち立てていったのである。彼等の教判論は、自らの証悟をもたらした經典の優越性を示すための

基準・尺度を客観的に示すことが目的である。

教判論で優越性を論証された経典は、その教判を立てた人師・論師達を、分々の悟りに導いた経典であった。各教判論が持つ普遍妥当性、論理的整合性は、その教判を立てた人師・論師の悟りの段階と正比例している。

そこで、中国仏教の教判論で、その代表的なものとして、我々は天台智顛が立てた五時八教の教判を知っている。近年、この五時八教が、智顛より後に作られたとする説が出されたが、ここでは一往、智顛の創説であるとの伝統的解釈に従っておく。

天台智顛はこの五時八教の教判によって、中国にもたらされた膨大な経典を見事に整理、体系づけ、法華経こそが諸経中最第一の経典であることを論証したのであった。法華経が釈尊一代の教説のなかで、最高峰に位置するという智顛の結論は、五時八教の教判が先にあるので、そこから導き出された結論ではない。八万法蔵といわれる仏教経論のなかで、智顛自らが法華経に導かれ、法華経に基づいて自らの証悟を得たからこそ、法華経を最第一として位置づけたのである。

天台智顛が現れたころ、中国仏教界には、各宗各派が並び存し、教義の蘭菊を競っていた。学派・宗派の成立は、開祖による独自の教判論成立の時とされ、その教判は、各宗所依の経論を最第一とする。開祖の教えに従い、その法系に属す

る人々もまた、開祖が選り取り、教判論で示された経論に導かれて、自らも証悟を得、更に新しい教判論を立てて自宗を補強し、宣揚していったのである。

天台智顛の当時、中国には南三北七といわれる十師がいた。十師は、それぞれ教判を立て、各自が選り取った経論を奉持していた。智顛は、この十師と法論対決を行い、ことごとく論破したといわれている。

この事實は、十師の教判が、天台智顛の五時八教の教判に對して、全く齒が立たなかつたことを示すと同時に、十師のそれぞれが得た証悟が、智顛のそれと比べてはるかに浅く、しかも普遍性に乏しいものであったことを示している。

南三北七の十師は、智顛の証悟の深さ、広さ、普遍性の前に屈したのであった。それはまた、智顛が諸経論のなかから選り出した法華経こそ、釈尊の悟りに最も確実に人を導き得る経典であることを示しているのである。

仏教は悟りの宗教である。仏道を実践し、自らも釈尊の悟りを得ようとする者にとって、自らが得た分々の悟りが、果たしてどれほど釈尊のそれに近づいているかを確認することは、重大な関心事である。もし、その悟りの段階を正しく把握できなければ、人は増上慢に墮し、悟りの独断に陥ってしまうであろう。あるいは、ひたすらに自己を卑下し、懷疑の中に沈んでしまふかもしれない。諸経論が、仏道修行者の証

悟の段階について、詳説するのはこのためなのである。

五時八教の教判で、智顛は阿含經典を誘引の教えとして低く位置づけた。それは、阿含經で得られる証悟が、自己の悟りのみを考え、化他の実践を伴わない低い証悟であるとして斥けたのであった。釈尊の成道の様子を伝える仏伝經典には、化他の実践を伴う釈尊の悟りを無上正等覺と表し、等正覺、あるいは正覺と區別して示す場合がある。化他の実践によって仏法が堅立したことから、これは当然のことといえるであろう。

天台智顛の証悟から創出された五時八教の教判は、その後の仏教に大きな影響を与えた。伝教大師最澄が入唐し、天台教學を日本に伝えてから、仏教流伝の舞台は日本に移る。日本仏教においても、五時八教の教判は、何人もこれを打ち破ることができなかったのである。

日本仏教が開花した鎌倉期に現れた日蓮は、法華至上主義に立って、法華經こそ釈尊の正意であり、出世の本懐であることを強く主張した。日蓮はその論証のために、天台の五時八教を縦横に用いたことが知られている。

日蓮の法華至上主義は、天台の五時八教の教判からもたらされた結論ではない。日蓮は「されば我弟子等心みに法華經のごとく身命もおしまず修行して、此度仏法を心みよ」等と述べ、主体を賭した教法の選取りが、いかに重要であるか

を力説している。それは、日蓮自身が法華經の文に導かれ、身命を惜しまず仏道実践に挺身した故の結論である。

その結果、日蓮は天台智顛の証悟の深さが、他のいかなる人師・論師のそれよりも卓絶したものであり、智顛が選り取った法華經は、人を確実に釈尊の証悟へと導く經典であることを確認したのであった。それだけではない。竜樹や世親、智顛や最澄といった仏教流伝史上、重要な位置を占める人師・論師を証悟せしめた究極の成仏法が、法華經の文の底に秘沈しているととして、それを我々に開示したのである。そして、五綱（五義）、五重相對、五重三段などの独自の教判を立てて、それを論証した。なかでも五綱判は、五時八教の教判をも包含する壮大な教判論である。

日蓮の教判は、我々を確実に証悟へ導く究極の法が、法華經寿量品の文底に秘沈されている南無妙法蓮華經であることを説示するためのものであった。日蓮は「今、末法に入ぬれば余經も法華經もせんなし。但南無妙法蓮華經なるべし」と述べている。正像末の三時史觀の上からしても、白法隱没の末法今時においては、もはや法華經すらも、我々の証悟に益なく、ただ南無妙法蓮華經のみが、我々を確実に証悟へ導く法だといっているのである。ちなみにこの文は、五重相對判の第五重・種脫相對を示す文に該当する。

明治維新を迎え、我が国は急速に近代化への道を進む。仏

教界もその例外ではなかった。

近代仏教学の方法論は、大乘經典のすべてが、釈尊よりもはるか後代の創作であるとしたが、その故に天台の五時八教の教判も、当時の歴史的、社会的制約のもとで成立した時代の産物であって、現在では通用しないという意見も出されるに至った。また、その五時八教を用いて法華至上主義に立つ日蓮の教説もまた、その根拠を失うとするのである。

しかし、こうした見解は、仏教が究極の目的とする証悟を看過した皮相的な見解であり、それは、文献学の方法論に傾斜する近代仏教学の悪しき傾向から生じたものである。

本来、仏の悟りは、言語による表現を超え、言語で表すことができないものであった。經典の製作は、言葉を超えたところにある仏の悟りを、あえて言葉で表現しようとする試みである。經典の作者にとって、その經典を読む者を悟りに導くことは、最大の課題であった。言語で表現できない仏の悟りを言説化する作業は、自らも仏の悟りに肉迫し、その悟りの核心を把握した者以外には、全く不可能な作業である。故に、經典は仏陀釈尊の悟り、あるいはそれに極めて近い悟りを得た人々の手によって成ったものなのである。

釈尊入滅後、さまざまな經典が作られていったが、その冒頭には一様に「如是我聞」の文字が置かれている。これは、釈尊の入滅直後に行われたという經典の第一次結集の際、多

聞第一の阿難がこのように述べてから、釈尊の教えを暗誦した。それを他の長老達が認可して、經典を作成したというひそみにならっているのである。

後世の經典作者は、まさに作者自身のなかに顕現した仏陀釈尊の声を聞いた故に「是くの如く我れ聞きき」と、經典の冒頭に置いたのであった。そして、我が胸中に響く仏陀釈尊の教説を言説化していったのである。故に各經典に説かれた教説間の優劣、浅深は、その經典製作者の証悟の優越性、証悟の深さをそのまま表しているのである。

浅い証悟から創作された經典に導かれても、浅い証悟しか得られないであろう。釈尊の悟りに肉迫せんとすれば、深き証悟からもたらされた經典に導かれることこそ、最も益多き仏道実践なのである。煩瑣に流れ、労多くして益少なき実践は、仏教が目指す証悟を我々から遠くする。ここに証悟実現のための教法選択の基準を示す教判論の重要性が浮かび上がってくるのである。

今、我々に要請されていることは、自らの主体を賭して、自らの証悟のための教法を選び取ることであろう。『仏教学盛んにして仏教廢る』ということが指摘されて久しい。我々は、ここで教判論の意味を再考し、自身の証悟実現に思いを留めたいものである。